

2016 年脳卒中学会抄録

後方循環系の急性再開通療法の検討

木村浩晃、赤路和則、片野雄大、望月洋一、志藤里香、谷崎義生、美原盤

美原記念病院 神経内科

Department of Neurology, Mihara Memorial Hospital, Ise, Japan

美原記念病院 脳神経外科

Department of Neurosurgery, Mihara Memorial Hospital, Ise, Japan

美原記念病院 脳卒中部門

The Cerebrovascular Division, Mihara Memorial Hospital, Ise, Japan

【目的】 当院での後方循環系の脳主幹動脈閉塞症例に対して行われた急性再開通療法における再開通率や機能予後など臨床指標の検討を行う。

【方法】 当院でステント型リトリーバーが導入された 2014 年 7 月から 2015 年 10 月まで 19 例に急性再開通療法が行われ、そのうち後方循環系の閉塞であった 4 例を今回の主な研究対象とした。来院時 NIHSS、穿刺から再開通あるいは手技終了までの時間、用いたデバイスや手技、TICI 2B-3 の良好な再開通、3 か月後 mRS 0~2 の機能予後良好の検討を行った。同時期に治療した前方循環系の症例 15 例との比較を行った。

【結果】 来院時 NIHSS は後方循環系と前方循環系でそれぞれ 5-12(中央値 9.5)と 5-27(中央値 15)だった。穿刺から再開通までの時間は平均 114 分と 101 分だった。後方循環系の症例でステント型リトリーバーが用いられたのは 4 例中 1 例のみであり、4 例全例で 2 種類以上のデバイスや手技が用いられた。一方、前方循環系では 15 例中 10 例で 1 種類のデバイスや手技使用で治療が完結していた。TICI 2B-3 の良好な再開通が得られたのはそれぞれ 4 例中 1 例と 15 例中 8 例だった。3 か月後 mRS 0~2 の機能予後良好は 3 例中 1 例と 13 例中 8 例だった。

【結論】 後方循環系の急性再開通療法の有効性は未だ明らかでなく、症例選択や手技に関してさらに検討が必要である。